

# 自らの意志を表す動詞「やる」 —日本語母語話者の談話における使われ方と学習者が学ぶべき用法—

## The Verb “YARU” which Represents One’s Own Volition

### How to use it in the Discourse of Native Japanese Speakers and How Learners should Learn

文学研究科国際言語教育専攻修士課程修了

渡辺 園子

Sonoko Watanabe

#### 要旨

「やる」は、日常よく使われる基本語と言える語であるにもかかわらず、初級日本語教科書での扱いは限定的であり、多くの学習者には「やる」の用法を正確に学ぶ機会すら提供されていない。しかし先行研究からは、「やる」には多様な用法があり、特に対象が特定されず使われる場合に自らの意志を表すことがわかる。そこで、日本語母語話者の使用する「やる」を語用論的な角度から分析すると、「発語内の力」が発揮されるという考察に至った。これらを踏まえたうえで、意味論と語用論の側面から「やる」の働きを分類し、日本語教育の学習段階別に「やる」を導入するシラバスを提案する。

**キーワード**：意志を肯定的に表す、発語内の力、学習段階別シラバス

#### はじめに

「やる」は、日本語母語話者の生活場面で使用頻度の高い語の一つであるが、辞書を調べても、授受や移動以外は「する」の代わり、くだけた言い方、または俗語的といった説明が一般的である。ところが実際に使用されている場面を観察すると、思いのほか幅広い意味・用法があり、しかも「やる」には、自らの意志を肯定的に表す働きがあることに気づく。

例えば次の文は、「やる」が公式に使われたものである。

やらされていると思うか

自らやると決意するか。

微妙な一念の違いで

結果は大きく変わる。

喜び勇んで使命の道を！

(「わが友に贈る」『聖教新聞』2019. 11. 13)

これは、創価大学創立者でもある池田大作の箴言であり、私的なものではない。この「やる」は俗

語とは言い難く、「自らすると決意するか」などと言い換えることもできない。母語話者はおそらく、この「やる」から、自らの受け身的な思考を反省し、自ら行動を起こす決意をするであろう。しかし、なぜ、「やる」はこのような使われ方をするのだろうか。

本稿では、自らの意志を肯定的に表す「やる」について考察するとともに、その働きを分類し、日本語教育に導入して、学習者が自然に使えるようになることを目指すものである。

## I. 先行研究

動詞「やる」の現状の確認にあたり、歴史的考証を重視する『日本国語大辞典第二版』(2002) (以下『日国』) と、現代語の使用実態に敏感な『三省堂国語辞典第七版』(2014) (以下『三省堂』) を参照する。これらの辞書から、「やる」の本動詞、補助動詞、俗語の記述と、さらに自らの意志を肯定的に表す「やる」について確認しながら、関連する先行研究にも併せて言及する。

まず、本動詞「やる」の古い用例は、上代(『日国』[一](1)(2)『万葉集』)のもので、現在も同様(『三省堂』㊦①②)の移動動詞である。もう1つ、上代の用例(『日国』[一](3)『万葉集』)のもので、現在(『三省堂』㊦③)の授受動詞も、基本的な用法だろう。

さらに、「ある動作や行為をする。『する』よりも俗ないい方」の近世「とりはづしてずいとやり、(後略)」(『日国』[一](19)『咄本』)という記述では、この用例を堀口(1984:34-35)は、「『する』に言い換え可能の『やる』の用法の中に入れられることもあるのであろうが、両者は異質な表現だったのではなからうか」と述べ、同じ用例について豊田圭子(2014:48)でも、「ヤル」は「前代の用法であった〈事物の進行〉の『事物』の部分の抽象化(希薄化)し、概念的な名詞もとることができるようになったもの」としている。つまり本来は、「する」の代わりではなく「やる」特有の動作の用法だったと考えられるが、現在では単に、「する」や「動詞」の代わりの用法(『三省堂』㊦④⑤)という記述である。しかし現在でも、中本(1986:40)は「～をする」と「～をやる」の比較から、「『する』が、行為や変化、そして基準による判断処理や状態など、広い意味領域に用いられるのに対し、『やる』は、『する』と類義の関係を結ぶときには行為だけに限って用いられ、しかもその行為は意志的なものに用いられる」と述べ、意志的な行為の場合が「やる」だとしている。これに関連して、大塚(2002:7)は「～ヲする／やる」では、「『する』は専ら機能動詞として働き、『やる』は機能動詞から実質動詞まで広い用法をもつ」としている。これは村木(1980:18)が、「においが する」と「におう」について「連語の名詞部分が、実質的意味(あるいは素材的意味、語彙的意味)をにない、動詞部分は、本来の実質的意味をまったくもたないか、もしくはほとんど失っていて、もっぱら形態論的かつ統語論的な役割をはたしていることがうかがいしれる」として、この「する」を「機能動詞」と定義したもので、大塚(2002:17)では、名詞と結合した「～ヲする／やる」の実質的意味の有無と「する」と「やる」が実質動詞か機能動詞かということをも13項目に分類している。これらの研究から、「やる」を「する」に置き換える用法については、書き言葉において「する」は機能動詞、「やる」は機能動詞、実質動詞

## 自らの意志を表す動詞「やる」

の両方の用法を持つということがわかる。

次に、補助動詞「～てやる」について確認すると、中古の用例（『日国』〔二〕(3)④『落窪物語』）が古く、現在（『三省堂』㊦①）と同じ移動の補助動詞である。さらに近世と近代の用例（『日国』〔二〕(3)④『滑稽本』『雁』）と、現在の「利益をあたえる／害をあたえる」（『三省堂』㊦②③）では、恩恵と非恩恵としての授受の補助動詞として記述されている。

しかし、ここで重要なのは、「動作が強い意志を持って行われることを表す」近代の用例「（略）見せ付けて遣（ヤ）ることが出来る」（『日国』〔二〕(3)⑤『青年』）という、意志性に関する記述である。日本語教育の分野でも、庵ほか(2001:168)で「授受の補助動詞表現の恩恵を表さない用法」として『～てやる』は(1)いつか偉くなってやる！のように動作を遂行する決意や強い意志を表す表現として用いられることがあります」とあるように、強い意志を表す用法があり、これに関連して、豊田豊子(1974:81)が「もとなる動詞がどの方向に働くかが、すなわち動作の方向が補助動詞『やる』と助詞によって明確にされる。しかしその主体の動作が対象である相手に受け入れられるか否かは関係ないのである。それは、もとなる動詞がもともと話し手の主観によった表現であるからである。」と論じている。つまり補助動詞「～てやる」は、主観によって不特定の対象に使われる場合、自らの意志を誇示し行動を起こす用法があるということである。しかしそれが、本動詞「やる」の、自らの意志を肯定的に表す用法にどのようにつながるのだろうか。

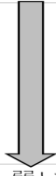
この、「やる」と「～てやる」について、堀口(1984:40)は「前者が本来的な用法で後者が二次的な用法であるようにいわれることが多いが、(中略)両者は伯仲している。利か害かは、もっぱら上の動詞で示される意味によって左右される。が、この『やる』の基本的意味は、その行為が相手に及ぶことを表すというよりは、その行為を完全に遂行すること(マ)表すものであったのではなからうか」と述べており、両者は重複する使われ方をしていたと考えられる。現在でも、本動詞「成果を上げる」の「やりました、ついに初優勝」（『三省堂』㊦⑥）と、補助動詞「がんばって実現する」の「何としても合格してやる」（『三省堂』㊦⑤）は、意味が重複し用例の対象は不特定である。この場合、補助動詞は自らの意志を誇示して行動を起こし、本動詞は行動した成果と考えると、「～てやる」→「やる」→「やった」というアスペクトのような働きにおいて、意志を表す連続性が認められる。つまり「やる」の補助動詞と本動詞は、対象が特定されず使われる場合に自らの意志を表す共通点があると言える。

最後に、意志性が強いと思われる、俗語としての「やる」を見てみよう。近世の「だます」（『日国』〔一〕(14)）と、現在の「被害を受ける」（『三省堂』やられる②）の記述をはじめ、現在と同じ意味記述は全部で6つある。「やる」の俗語性については、大塚(2006:39)が、新聞記事を検証し「話しことば性質の強さ」と「様々な卑俗な用法の存在から『やる』の卑俗性という性質が検証された」として「やる」の「俗語性」を結論している。また國弘(2007:55)は、ラジオ会話中の「やる」を分析し「会話の背景を理解できていれば、その意味するところを『やる』一語で示すのみで、全てを発言しなくてもよいこととなる。この用法は表だって口ににくいことを述べる場合にも有効であり、この点を

もって、『やる』が俗語的とされる理由と考えられる」と述べている。しかしどちらも、その意志性については深く言及していない。

そこで、ここでは自らの意志を表す用法の一端と捉えているので、辞書に記述はなかったが、大塚(2006:39)で述べられている「悪習となる嗜好／病気の経験」の用法を加え、これら「やる」の俗語を、表1のように、用例にして意志性の強さの順に並べてみた。

表1：俗語的な「やる」の意味・用法と意志性

用例	意味・用法	意志性
「熊をやる」「あいつをやる」	危害を加える、殺意	
「100万やられた」「あの家をやる」	だます、盗む	
「彼／彼女とやる」	性交	
「麻薬をやる」「覚せい剤をやる」	習慣性嗜好、犯罪	
「毎月いくらでやる」「元気でやる」	生活、暮らし	
「一杯やる」「一服やる」	嗜好	
「やっちゃった」	失敗する	
「おたふくかぜをやる」「胃をやる」	病気にかかる	

このように、用例と意味・用法を並べてみると、俗語としての「やる」は「する」に置き換えられない用法であり、対象を攻撃する用法に意志性が強く表れていることがわかる。

以上、現状の「やる」については、補助動詞等も含めると意志性を表す意味・用法は見られるものの、決定的な自らの意志を肯定的に表す用法についての記述は見当たらない。

## II. 日本語教育における「やる」

ここで、現在の日本語教育における「やる」の扱われ方を確認しておこう。その確認は初級教科書に限定<sup>1</sup>する。知名度の高い『みんなの日本語初級I・II第2版本冊』(スリーエーネットワーク編2012・2013)と、大学進学目的の『初級日本語上・下』(東京外国語大学留学生日本語教育センター編2011)の2種類である。これらで「やる」は、授受表現、いわゆる「やりもらい<sup>2</sup>」表現として、補助動詞、移動動詞とともに学習項目にあがっている。そこで、そのほかの用法の扱われ方とその問題点を探っていく。その基準として、日本語教育にどのように語彙を取り入れるべきか記した森田(1991:100-101)

<sup>1</sup> 中級教科書では、『ニューアプローチ中級日本語[基礎編]改訂版』(小柳昇2004)の「やる」をすべて抜き出した中に「やる気・やっておく・やればできそう・やってみたい・最後までやりましょう・やってみたら・やるからにはしっかりやれ」等、初級にはないものもあった。『J. Bridge ジェイ・ブリッジ』(小山悟2002)は6文のみで、すべて初級と変わらないものだった。いずれも他の文型メインでランダムという点では初級と大差なかったため本文から除いた。

<sup>2</sup> 現在では「あげもらい」が多い。庵ほか(2000:110)では「以前は『花に水をあげる』や『犬にエサをあげる』はおかしいとされていましたが、『あげる』が『やる』よりも丁寧な言葉であるという意識から許容されるようになってきています」と、「やる」は目上からに限定され、授受表現からも「やる」はごくわずかししか扱われない傾向にある。

## 自らの意志を表す動詞「やる」

が、先行文献<sup>3</sup>として挙げている、小泉ほか(1989: 524-526)の「やる」に関する記述<sup>4</sup>には、「(5)あることを行う」の用例に「タバコ・酒・一杯」の目的語や、「(6)痛めつけたり害を加えたりする (7)生活する (8)病気にかかる」等、俗語としての用法もあるため参照する。該当の用法の番号と、目的語の種類から「やる」が含まれる文を分析する。なお大塚(2002:17)の分類も参照する。

まず、『みんなの日本語初級』の初出は、16課「大学までどうやって行きますか」の学習項目で「どうやって」は新出語彙である。それ以降の「やる」が含まれる文は、14か所あるが別の文型の練習問題に突然出てきており、すべて「(5)あることを行う」用法である。目的語の種類と、数をあげると「仕事 4/勉強 3/動作 3/練習/催し事/習い事/料理」であった。その用法のうち、特に疑問なのが、6課で「うちで宿題をします」と学習したものを、29課では「やる」の意味・用法に関して何も学習しないまま、わざわざ「宿題はもうやってしまいました」で練習させることである。このように「やる」は、学習項目として扱われていないだけでなく意図的な配置も見取れない。結果的に学習者は「する」の代用と受け止めるであろうが、なぜ「やる」が使われているのか、どういうときに使用するのかを理解するのは困難である。

次に、『初級日本語』の初出は、10課の練習問題「やきゅうをやります」「やり方」である。これら「やる」の文は、練習問題、本文、文型など全部で32か所ある。ほとんどが「(5)あることを行う」の用法で、その目的語の種類は「仕事 6/運動 5/勉強 4/集団活動 3/練習 3/動作 3/行為/職業/商売/催し事」である。しかし26課「何でも責任持ってやる」では、目的語が明示されていないが、文脈から目的語は「生活全般」とわかり、唯一「(7)生活する」用法である。さらに注目されるのは、副詞「一生懸命に・急いで・熱心に」を伴った意志や意欲を感じさせる「やる」の文である。『初級日本語』は『みんなの日本語初級』と比べて、多様な「やる」の用法が出てくるが、やはり学習項目として取り上げられていない点が残念である。

どちらの教科書も、各所に出ているほとんどが「する」の代わりに、「(5)あることを行う」用例の飲酒や喫煙に関するものや「(6)痛めつけたり害を加えたりする」「(8)病気にかかる」という用法はないが、初級ではふさわしくない、必要ないという判断かもしれない。さらに肯定的に自らの意志を表す、といった使われ方の「やる」は見当たらない。結果的に、目的語の種類を分類しても、どのようなときに「やる」が使われるかを多少は類推できるが、なぜ「する」ではなく、「やる」が使われているのか違いがわかりづらい。大塚(2014:59)でも『みんなの日本語』と他の初級教科書の2種類の教科書中の「やる」が含まれる文を調査し「どちらも練習や問題の中に出てくる表現であり、積極的に教え

<sup>3</sup> 「特に文法的意味を持つ語彙を中心に、各語ごとにどのような文型を形づくるか、文型表をまとめてみることも大切な仕事と言えよう。幸い、以上の作業には、すでにいくつの先行文献〔注(小泉ほか編1989)(森田1994)〕があるのでそれらを参考にし、叩き台にして、より詳細な、より実用化の高い調査研究を進めることを期待したい」

<sup>4</sup> 「やる 遣る」【意味・文型】の(1)~(10)のうち上記以外の項目と、【複合動詞】を除く、【文法情報】【語形】【慣用句】【類語】にあった記述は、いずれも授受・移動の意味。

るのではなく、少しだけ例を入れるという形で示されている。『やる』には卑俗な表現も見られるため、すべてを初級で教える必要はないが、『する』との違いについては説明がある方がわかりやすいだろう」と述べている。

以上のように、初級日本語教科書においては、「やる」の意味・用法を、文型として整理した形で提示してはいないということがわかる。

### Ⅲ. 日本語母語話者の話し言葉と談話における「やる」

前章まで、「やる」についてのさまざまな記述を確認したが、自らの意志を肯定的に表す使われ方は見落とされていた。そこで、実際の母語話者の話し言葉と談話から、「やる」がどのように使われているのか分析し、「やる」の「発語内の力」という視点から考察する。

#### 1. 話し言葉における「やる」

はじめに、実際に母語話者が使う「やる」について考察する。まず、(A)の宇多田ヒカルのインタビュー映像の話し言葉から、「やる」が使われる文脈、発話動機、発話意図、意味等を分析する。

(A) ナレーション：宇多田が自身の音楽づくりで貫き通す思いがある。

—ものづくりは、冒険—

宇多田：やれる<sup>㉑</sup>ことをやっても<sup>㉒</sup>本当に意味がないと思ってるので。やってみて<sup>㉓</sup>どうなるのかわからない、もしくはやれる<sup>㉔</sup>かどうかかわからないことをやる<sup>㉕</sup>ってというのが、ものをつくる現場なので。(後略)

(NHK 総合テレビ「プロフェッショナル仕事の流儀宇多田ヒカルスペシャル」2018.7.16 放送)

(A)の、下線部分の㉑は、ナレーションの文脈から「これまでの自身の音楽づくりの過程」と受け取れ、㉒は「(その過程を)同じようにたどっても」となる。続いての㉓は前の文脈を受けて後の文脈へと続く意味から「これまでと違う音楽づくりに挑んで」みて、と解釈でき、㉔は「それに挑んでみてこれまでと違う新しい音楽をつくれる」かどうか、という到達点が見えない心理状態を表し、㉕は「それでも紆余曲折しながら新しい音楽をつくるために挑む」という意志が感じ取れる。試みに、下線部分を「する」にした(A)'はどうだろうか。

(A)' 宇多田：できることをしても本当に意味がないと思っているので。(作曲) してみてどうなるのかわからない、もしくはできるかどうかかわからないことをするってというのが、ものをつくる現場なので。

## 自らの意志を表す動詞「やる」

(A)' は、(作曲)を補えば文法的には問題ないが、一瞬、何をするのか、という疑問が生じ、これから新しい音楽をつくることに強い意志を感じられず、ものづくりにそれほどの情熱や意欲を感じ取ることができないものになる。

次の(B)は、同じシリーズの番組、吉永小百合のインタビュー映像での話し言葉である。

(B) -プロフェッショナルとは-

吉永：そうですね。とにかく映画が好きで、この世界でずっとやってきました<sup>㊸</sup>し、そういうことってのがプロフェッショナル、なのか、どうか、ちょっと自分ではわかりませんね。(中略)あの、これからも、皆さんに見ていただけるような作品に、出られるように、しっかりやりたい<sup>㊹</sup>と思います。

(NHK 総合テレビ「プロフェッショナル仕事の流儀吉永小百合スペシャル」2019. 10. 26 放送)

(B)の、㊸では、映画という世界に人生のすべてをかけて取り組んできたという印象を受けるが、これが「ずっとしてきました」であつたら伝わらない。最後の㊹も、前文脈から、映画という世界で、多くの人に求められる作品に取り組んでいきたい、という彼女の決意と受け止められる。これは、「しっかりしたい」とまったく違う意味である。

このように、母語話者の話し言葉において「やる」は頻繁に使われているが、「する」の俗な言い方とは言えない。第一、「する」に置き換えた場合では、受け取る印象がまったく違い、何より話し手の意図が伝わらない。ここでの「やる」には、人生の葛藤や困難といった過程を踏まえて、挑む、挑戦する、といった、宇多田や吉永の決意を、説明なしに理解できる働きがある。つまり、公式の場で、「やる」が自らの意志を肯定的に表す使われ方をしていることが観察できるのである。

## 2. 「やる」の談話における発話状況

次に、母語話者の談話を考察するにあたり、語用論の観点から、山岡ほか(2018:10-13)の、「発話の効力を決定する発話状況の諸要素」である「[1]発話参与者(話者、聴者) [2]言語的文脈 [3]非言語的文脈 ①共有知識②社会通念③場面」を参照する。これらの要素を、実際の母語話者の談話における「やる」にあてはめ、話者の発話意図の効力を分析する。

次の(C)は、不動産屋を営む齋藤さん(女性 30代)の、ドキュメンタリー番組の一場面である。

(C) ナレーション：簡易宿泊所を出て新しい生活を始めた渡辺実さんです。(中略)話の最後に、  
渡辺さんが切り出したのは、自分の父親のことでした。

齋藤：そっかそっか。

渡辺：で、お父さんとも、あの自分が、2歳とか、そんぐらいの頃に、離婚しちゃったん

で、顔も、覚えてなくて。

齋藤：うん、うん、うん。

ナレーション：母親に引き取られた渡辺さん。父親の記憶は全くありません。どんな人なのかずっと知りたと思ってきました。3年前、その父親の消息がつかめました。(中略)渡辺さんは、会いに行くべきかどうか迷い続けてきました。

齋藤：毎日毎日やっぱ後悔ないようにね、生きといたほうがいいじゃん。

絶対そう思う。

渡辺：うん、うんうんうん、ああ、ああ、ああそうだね…

齋藤：私はだからやりたいな、と思ったら、まあやってみる。まず。

渡辺：まず、こう、早めに行動…

齋藤：まずやっちゃう、やるやる。やって、そのあと考える。

渡辺：ああ。

齋藤：あ、やっぱり失敗した、ってこともあるよ。

渡辺：ああ、まあまあまあ…

齋藤：でもそれはそれでいいじゃん。

渡辺：ま、やってみないと分かんないとこもあるしね。

齋藤：そうそうそうそう。だからもう会いたいと思うんだったら、まずそれは今会う時なんだよ、きっと。

渡辺：うん、うんうん、うん早くね…

齋藤：行っちゃたらいいよ…

渡辺：うん…

ナレーション：2週間後、渡辺さんは父親が住む富山県へ向かっていました。

(NHK 総合テレビ「目撃! にっぽん おせっかい不動産」2019.4.7放送)

[1]発話参与者は、齋藤さんと、齋藤さんに日ごろから世話になっている渡辺さん(男性40代)である。実際の談話はナレーションの内容で展開され、渡辺さんの迷いは[2]言語的文脈となっている。それを聞いた齋藤さんの「やりたいなと思ったらまずやってみる」には「やる」の具体的に指し示す事柄が、言語的文脈からも、[3]非言語的文脈からも見つからない。渡辺さんが少し戸惑って「早めに行動…」とつぶやくと、齋藤さんはたたみかけるように「やる」を連発し「そのあと考える」と付け足している。これは、齋藤さん自身の経験を強調しておりアドバイスではない。この「やる」には、苦しいことや困難なことがあっても何度も挑戦してきたという齋藤さんの意志を感じることができる。渡辺さんもそれを感じ「ああ」と納得の相づちを打ち、さらに齋藤さんの「失敗したってこともある」「それはそれでいいじゃん」で、ようやく納得したように「やってみないとわからない」と発話して



いる。この最後の「やる」には自らの心の葛藤を振り払って挑戦しようという決意が感じられる。

### 3. 「やる」の「発語内の力」

前節の(C)をもう少し詳しく分析してみよう。(C)の発話参加者の言語的文脈を見ると、「やる」の目的語は見当たらず、非言語的文脈の①共有知識②社会通念③場面にも当てはまらない。しかし、話者から聴者に、「やる」が、意欲、自発、積極性、挑戦、といった意味として伝わり、話者の経験を補うことで、聴者が、その「やる」の「(何か) 行動する」ことと、さらにその中の「自らの意志を持ってそれを行動に移す」という意味を理解していると考えられる。それは、「やる」が持つ、Austin(1962:99-108)の「発語内の力 (illocutionary force)<sup>5</sup>」と言えるのではないだろうか。

Austin(1962:150-160)は、いくつかの遂行動詞(performative verb)を分類している。「やる」をこの遂行動詞とすると「dare , defy , challenge」に近いが、完全には一致しない。しかし、「やる」と訳すことがあるこれら3つの動詞は「態度表明型(Behabitives)」に分類されている。Austinは「態度表明型」についてその境界線が重なる部分も示唆し、他人や自分の行為に対する態度や、自分の感情を表出する態度なども含まれるとしている。これは、(C)において、「やる」の「(何か) 行動する」、さらにその中の「自らの意志を持ってそれを行動に移す」という分析に通じるものがある。そこで、Austin(1962:99-108)の「発語行為(locutionary act)、発語内行為(illocutionary act)、発語媒介行為(perlocutionary act)」の観点からこの「やる」という動詞を考察しよう。発語内行為とはその発話の目的であり、発話状況において実際に発揮される効力が「発語内の力」であるが、「やる」の発語内効力は、発話状況に応じてさまざまに発揮されている。あらためて、このような視点から(C)の「やる」を見てみると、齋藤さんの発話、「やりたいなと思ったらまずやってみる」の発語行為は、[私は(何かを)やる]であるが、発語内行為は、[私は挑戦してきた／している]であろう。それが渡辺さんに伝わっていないと見ると、即座に「まずやる、やってその後考える」と、自分のこれまでの経験だという発話を付け足し、[私は挑戦してきた／している]という発語内行為を強調している。すると、渡辺さんは納得しかけ、さらに齋藤さんが自分の失敗という経験をも付け足すと、齋藤さんの「やる」の発語媒介行為と思われる[あなたも挑戦した方がいい]が、渡辺さんに伝わり、「やってみないとわからない」という発話を引き出したと考えられる。このような、談話の一連の流れの中の「やる」には、話者の、主観的な、経験やその結果の経緯を裏付けにして、これから起こす行動の目的までも「やる」が表し、聴者に、そのような「やる」による話者の意図を共感させるという働きがあると考えられるのである。

この、談話における「やる」の働きは、冒頭の箴言や、インタビューでの話し言葉にも共通する特徴だと言えるだろう。「わが友に贈る」では、いきなり「やらされていると思うか」という一文に、目

<sup>5</sup> 坂本百大邦訳(1978)、引用ページは原文。

的語が無いにもかかわらず、読み手の主観的な、マイナス思考による行動の経験に結び付ける働きをし、「自らやると決意するか」で、やはり主観的に、自らのこれからのプラス思考の行動を決意するという働きがあると考えられる。またインタビューという公式の場での、(A)の宇多田と、(B)の吉永の発話状況も、共通して、自らの人生の経験や、結果の経緯やこれからの行動の目的を、主観的に語るうえで、より聴者に共感される表現として「やる」が使われていると感じられる。さらに談話においては、話者と聴者に、非言語的文脈①共有知識②社会通念と言ってもいいほどの、自らの意志を肯定的に表す「やる」が使われているのではないだろうか。

以上のように、母語話者が使う「やる」には、発話状況による推意も相まって、より発話参与者間の共感部分に働きかける意味・用法がある。つまり、「やる」という動詞には、話者の自らの意志を肯定的に表すという、「発話内の力」が発揮される働きがあると考えられるのである。

#### IV. 「やる」の発話内での働きの分類

前章まで、「やる」には、自らの意志を肯定的に表す用法はあるのかという視点を中心に分析してきたが、話し言葉や談話には断片的に現れるものの、その用法の記述は見落とされている。しかし「やる」の意味・用法を日本語教育で扱うためには、「やる」の働きを分類して提示する必要がある。そこで自らの意志を肯定的に表す「発話内の力」が発揮されるという点を軸に、新たに「やる」の発話内での働きの用例を作成し、分類することとする。

分類基準は、発話者の意図が発揮される、意味論、語用論の側面を取り入れた用例を作成し、さらに山岡ほか(2010:122)の「文機能とは、主語の人称と述語の語彙・形態・時制の計4項目の命題内容条件が満たされた場合に、発話状況に関わりなく文形式そのものが持つ機能を概念化したものである」という「文機能」の考察も加え、用例が遂行動詞として機能しているかどうか、山岡(2000:85-86)の「(遂行)の命題内容条件<sup>6</sup>」を参照して検証する。

##### 1. 「やる」の働きの分類

はじめに、「する」に置き換え可能な「やる」の働きの「生活・学業・スポーツ・職業・行事・催事・放送」は、「やる」の意味・用法として位置づけられているため除外する。

表2が、「やる」の働きの用例を上述の基準にしたがって分類したものである。

まず、1の分類は各働きの範疇で、「意志表出」は自らの意志を強く表し行動を起こそうとするもの、「経過状態」はそれぞれの働きの場面や対象に応じた意志性や評価性が現れるもの、「状態結果」は結果となる過去形である。2の分類は各働きの範疇で、3は用例である。4は、その用例の文機能を、非過去、過去で検証している。そして「意志性」には、強弱を示すために矢印と音楽記号(例：F=フォルテ)

<sup>6</sup> (遂行)の命題内容条件 ①述語が遂行動詞であること ②主語が第1人称動作主格であること ③非過去時制接辞-ruを接続すること ④モダリティ付加辞を接続しないこと ⑤アスペクト接辞-tei-を接続しないこと

自らの意志を表す動詞「やる」

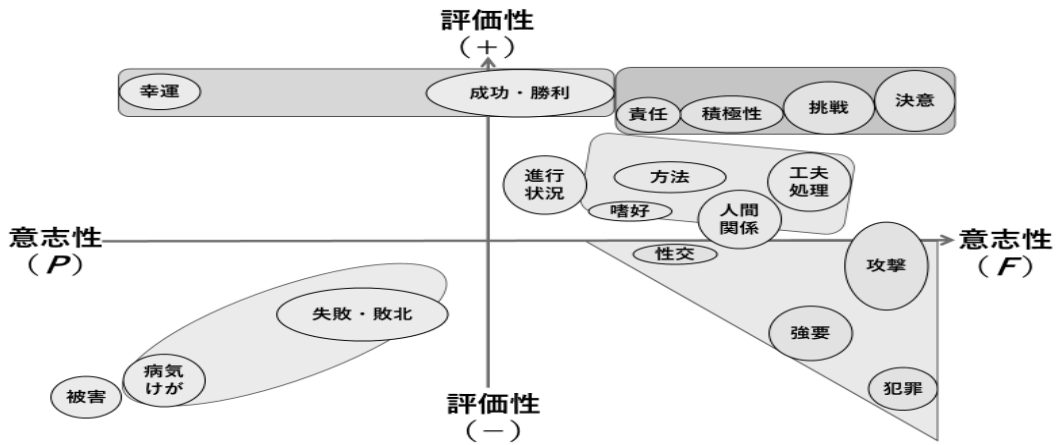
を付し、最後に「評価性」(+-)を付けた。

「意志表出」は、例えば「決意」(2)「民衆のための平和外交を 必死で やり抜きます」(3)は、「必死で」などの「やる」によく使われる副詞や、複合動詞、補助動詞、複合名詞も「やる」の意味が強いものを入れたため、用例が文機能の〈遂行〉にならないものもある。さらに「攻撃」(2)「試合後半で一気にやれ」(3)は、監督の発話で、主語は第1人称動作主格ではなく、動詞形態は命令形である。しかし3の述語部分を置き換えた4では、主語が第1人称動作主格の、選手の発話で〈遂行〉となる。「挑戦」「強要」(2)も可能形、命令形の用例だが、4では言われた側の発話で〈遂行〉としてその働きは維持され、この範疇に分類できる。このような文機能の検証で、「意志表出」の範疇は、すべて〈遂行〉と判断できる。

表2:「やる」の用例と分類

1	2	3			4		意志性 (強弱)	評価性 (+-)
意志表出	決意	民衆のための平和外交を	必死で	やり抜きます	やる	やった	FF	+
		この偉業を	最後まで	やり通します	やる	やった		
	挑戦	誰もできなかった登攀を	絶対に	やってやる	やる	やった	FF	
		A:新記録を B:君は		出してやる やれる	やる	やった		
	積極性	この企画を		やらせてください	やる	やった	F	
		社会福祉の取り組みは	何としても	やり通す	やる	やった		
	責任	地球温暖化対策は	早急に	やるしかない	やる	やった	MF	
		治水対策は国交省が	責任もって	やるべきだ	やる	やった		
犯罪	殺人を		やるつもりだ	やる	やった	FF	-	
	覚醒剤を		やってしまった	やる	やった			
攻撃	試合後半で	一気に	やれ!	やる	やった	FF	+-	
	バイキンマンを やられたら		やっつける やり返す	やる	やった			
強要	A:残務処理を		やりなさい	やる	やった	F	-	
	B:残務処理を(課長に)		やらされた	やる	やった			
性交	あいつと		やりたい	やる	やった	MF	+-	
経過状態	工夫 処理	主婦と経営者を	完璧に	やりこなす	やる	やった	F	+
		後は	うまく	やっておいて	やる	やった		
	人間 関係	毎月3万円の食費で	ギリギリ	やっていける	やる	やった	F	+-
		新人とは 一番出世とは	うまく	やれそうだ やってくれたな	やる	やった		
	方法	あいつとは	もう	やってられない	?やる	?やった	MF	+-
		A:いちよう切りは B:いちよう切りを(の)	どう	やるのですか やり方です	やる	やった		
嗜好	一杯		やろう	やる	やった	MF		
	一服		やりたいな	やる	やった			
進行 状況	A:そちらは	元気で	やっていますか	?やる	?やった	MF	+	
	B:まあ 妻のおかげで	なんとか ここまで	やっていますよ やってこられた	?やる	?やった			
状態結果	成功 勝利	A:今回の実験で	ようやく	やり遂げた	?やる	やった	MP	+
		B:そうか! 試合に勝った!	とうとう	やったんだな やったぞ	?やる	やった		
	幸運	宝くじが当たった!		やった!	?やる	やった	PP	-
		え、これくれるの?		やった!	?やる	やった		
	失敗 敗北	あーあ	派手に	やっちゃった	?やる	やった	P	-
		昨日 3回戦で	また	やらかしちゃった やられた	?やる	やった		
病気 けが	転んで足を		やってしまった	?やる	やった	PP	-	
	子供のころに麻疹を		やりました	?やる	やった			
被害	台風で屋根が		やられた	?やる	?やった		-	
	詐欺に		やられた	?やる	?やった			

図1：意志性と評価性による「やる」の位置づけ



「経過状態」は、主語が第1人称動作主格ではないものが多い。特に「人間関係」「進行状況」(2)の「やられていない」「やっている」「やられてきた」(3)などは、複合動詞としての意味が強く作用し、4では非文となる。しかし「する」には置き換えられない「やる」として日常的に使われるため、「経過状態」の範疇として分類した。

「状態結果」は、すべて、非過去時制「やる」(4)では非文となる。特に「失敗敗北」「被害」(2)については、動詞形態は受身形という点でも(遂行)の文機能ではない。しかしそれ以外は、すべて過去時制「やった」(4)では許容され、実際の発話状況や発話場面で、話者の主観的な「やる」の働きとして使われるため「状態結果」の範疇とした。

図1は、これらの各働きを、「意志性」と「評価性」をもとに配したものである。これを見ると、各働きには連続性が認められる。特に「意志表出」の範疇は、発話動機の時点での発話で、これから何か行動を起こすという発話意図から、自らの意志を表し、なおかつ強い意志性を持つものである。特に、「意志表出」の範疇のうち、評価性のプラス部分が、今まで取り上げられることのなかった、「やる」の、自らの意志を肯定的に表す働きである。このプラスの部分が目指すのは、「状態結果」の範疇の「成功・勝利」だが、意図せず「失敗・敗北」となる場合もある。その中間に位置する「経過状態」の範疇は、「やる」の主観的な性質の過程と捉えることができ、「状態結果」の範疇は、「やる」の経緯がプラス、マイナスに分かれた結果である。最後の「被害」に意志性はないが「やられた」の評価性は「やる」特有のものと捉え「意志性」の外に配した。

以上、話者の主観的な「やる」の「発語内の力」の発揮を想定し分類したが、これで、自らの意志を肯定的に表す働きを、「やる」の用法として記述できるものとする。

## V. 日本語教育における「やる」の指導のためのシラバス案

本章では、本稿の最終目的である、日本語教育に「やる」を導入するためのシラバスを作成する。なぜなら、Ⅲ. で見たように日本語教育では「やる」の用法は計画的な指導が行われていない。

そこで、前章の「やる」の働きの分類とともに、CEFR の Can-do の基準を用いた、初級 A1・A2、中級 B1・B2、上級 C1・C2 に相当する、JF 日本語スタンダード「コミュニケーション言語活動カテゴリー」にある「口頭でのやりとり全般」と、『JF 日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』から抜粋し表 3 に挙げた「共通参照レベル：話し言葉の質的側面」を参照し、各段階の言語能力と言語活動に則した「やる」のシラバスを作成する。

表 3：「参考資料 5」共通参照レベル：話し言葉の質的側面」（抜粋）

「使用領域の幅」	
A1	個人についての情報や具体的な状況に関する基本的な語や言い回しは使える。
A2	覚えたいいくつかの言い回しや数少ない語句、あるいは定式表現、基本的な構文を使って、日常の単純な状況の中でなら、限られてはいるが情報を伝えることができる。
B1	家族、趣味、興味、仕事、旅行、現在の出来事のような話題について、流暢ではないが、言い換えを使いながら表現するだけの語彙を十分に有している。
B2	十分に言葉を使いこなすことができ、一般的な話題についてなら、ある程度複雑な文を用いて、言葉をわざわざ探さなくても自分の観点を示し、はっきりとした説明をすることができる。
C1	幅広い言葉の使いこなしができ、一般的、学術、仕事、娯楽の幅広い話題について、言いたいことを制限せずに、適切な文体ではっきりと自分を表現できる。
C2	細かい意味のニュアンスを正確に伝えたり、強調したり、区別したり、あいまいさを避けるために、いろいろな言語形式で自由に言い換えができ、非常に柔軟に考えを表現できる。慣用表現、口語体表現も上手に用いることができる。

### 1. 学習段階別「やる」のシラバス

上述の基準で作成したものが、表 4 である。「やる」の働きを網羅的に振り分けており、おおむね、各学習段階の言語能力・言語活動にあわせた「やる」が導入できるだろう。

まず、初級は、現状を見る限り、教科書によって扱われ方が大きく異なることは問題だが、取り入れべき「やる」の用法は限られており新しいものはない。初級前半では、表 3 の A1 の内容にしたがって、表 2 で分類した「経過状態」(1)を中心に、「する」と「やる」の使い方の違いを明確にし、動詞の活用に「やる」を入れ、「する」との対比の上で導入したほうがよいだろう。初級後半では、「やる」のみを使う「経過状態」を中心に、A2 の基準を踏まえて、「状態結果」(1)の「失敗・敗北」(2)も加えてよいだろう。いずれにしても「する」には置き換えられない「やる」の使われ方を明確にする必要があるだろう。

次に、中級は、初級で取り入れた用法を踏まえて、上級につながるような、表現の幅を広げる「やる」の導入が考えられる。中級前半では、表 3 の B1 から、感情や心情を表現できるようにすることが

重要なため、初級では入れなかった「経過状態」を中心に「意志表出」(1)も取り入れるとよいだろう。中級後半では、表3のB2を見ると、かなり表現の幅が広がり、幅広い発話状況に対応する相互行為が求められ、指導すべき「やる」も多様になる。そのため、自らの心情や感情といったものを適切に表現することが重要であり、ことさら、自らの意志を肯定的に表す用法が必要だろう。そこでもっとも主観的な「意志表出」のうちプラス評価のものを中心に導入し、「状態結果」も加えて指導するとよいと思われる。

最後に、上級では、教材の内容も高度になり、学習する表現も日常使用される自然なものに近づくため、該当する表3のC1、C2から、上級学習者には、母語話者同士の談話にも難なく対応できるよう幅広い表現が必要である。日本語教育では、俗語として従来ほとんど扱われることがなかった「やる」によるマイナス評価の「経過状態」「状態結果」「意志表出」を学んでおく必要があるだろう。ただし、言うまでもないことであるが、これらの表現の中には下品、あるいは低俗なものもあり、使用する場面、対象の人物の選択などを間違えれば、非常に失礼な表現になるということと、あらためて「する」を「やる」に置き換えられない、表現や場面があるということを理解させておかなければならない。

自らの意志を表す動詞「やる」

表4：学習段階別「やる」のシラバス

初級前半	活動場面	日常での会話 「する」を使う時、「やる」を使う時。	
	活動目標	「やる」「する」両方使う表現の中で、自分から行なう場合、または、相手から行ってほしい場合に「やる」を使う。	
「する」「やる」 両方使う 名詞	生活	そうじ・りょうり・かたづけ・せんたく	例文 家に 帰ってから そうじを {し/やり} ます。 A：今日は やすみ時間も じゅぎょうを {やり/し} ます。 B：やすみ時間は じゅぎょうを {し/やら} ないでください。 日よう日は サッカーを {やって/して} います。 父は いしゃを {して/やって} います。 いっしょに ゲームを {やり/し} ましょう。 今、家で パーティーを {やって/して} います。
	学業・スポーツ	べんきょう・しゅくだい・じゅぎょう・しけん・れんしゅう・やきゅう・ピッチャー・サッカー・テニス	
	職業	しゃちょう・いしゃ・しょうせつか	
	趣味	ゲーム・ダンス	
	行事・催事	パーティー・ハイキング・かいぎ・けっこんしき	
「やる」 を使う 名詞	趣味	ブログ・おんがく・ピアノ・ギター	例文 Facebookは やりますか。 4才から ピアノを やっています。 兄は らいげつから レストランを やります。 そのこの スーパーは、10時まで やっています。 テレビで そのニュースを やっています。 あの えいがは らいしゅうから やります。 まい年、秋に 町でまつりを やっています。
	(習い事)	ピアノ・ギター・水泳 (～やっている の形で使う)	
	職業	(経営) みせ・レストラン (営業) スーパー・ほんや・レストラン	
	放送	ニュース・ドラマ・えいが	
	行事・催事	コンサート・まつり	
初級後半	行動場面	日常での会話 経緯や自分の動作を表す場合に「やる」を使う。	例文 インターネットの やり方を 教えてください。 おりがみの つるは どうやって 作るのですか。 このつるは うまくできなかったので やりなおします。 勉強と アルバイトは 計画を立てて やります。 授業の あと片づけは みんなで やっておきます。 日本では 毎月 7万円では やっていきません。 期末テストは 同じ問題で やってしまいました。 アルバイトで やらかして おこられました。 きのうの サッカーの試合は 相手チームに やられました。
	言語目標	前文脈や、場面に応じた動作について「やる」を使う。	
	方法	やり方・どうやって	
	工夫・処理	やる・やっておく・やりなおす・やっつけていけない	
	失敗・敗北	やった！・やらかす・やられた	
「やる」 を含む 語彙・ 表現	行動場面	経験や、これからの行動を、相手に伝える。	例文 母に、私は日本で元気にやっていると、電話しました。 日本で、先生や友だちが助けてくれたので、卒業までやってこられました。 新しいクラスの友だちとは、うまくやるつもりです。 結婚したら、日本で一緒にやっていこう。 私のルームメイトはわがままで、やっつけられない。 鈴木さん、テスト百点取ったなんて、やっつけてくれたね。 文化祭のポスター作りは、私がやります。 その企画は、ぜひ私にやらせてください。 レポートの提出は、明日までに必ずやります。 文化祭の、留学生参加ダンスは、絶対にやるべきです。 地球温暖化の対策は、各国が協力して、早急にやるしかない。
	言語目標	自分の経験や行動を表す「やる」の使い方。	
	進行状況	やっている・やっこられた	
	人間関係	やる・やっつけていく・やっつけられない・やっつけてくれた	
	積極性	やります・やらせてください	
中級前半	行動場面	行動に対する心情や、決意を、相手に伝える。	例文 A：民衆のための平和外交を、必ずやります。 B：そう決めたからには、何があってもやり通してください。 A：二つの国の友好をやり遂げます。何としてもやり抜きます。 B：最後までやり切ってください。あなたは、とてもやる気があると思います。 A：オリンピックで 金メダルを取ってやる。 B：君ならやれる。やってみる価値はある。 A：今まで失敗していましたが、今回の実験で、とうとうやりました。 B：よくやった。ついにやり遂げたね。 今年も大変だったが、何とか収獲までやり終えることができた。 えっ、本当にくれるの？ やった、ずっと欲しかったんだ。ありがとう。
	言語目標	自分がこれから起こす行動を成功させるという気持ちを表し、その行動の結果を表す「やる」の使い方。	
	決意	やる・やり通す・やり遂げる・やり抜く・やり切る・やっつけてける・やる気・やっつける	
	挑戦	やる・やれる・やってみる	
	成功・勝利	やった・やり遂げた・やり終えた・(よく) やった	
中級後半	幸運	やった！	例文 A：民衆のための平和外交を、必ずやります。 B：そう決めたからには、何があってもやり通してください。 A：二つの国の友好をやり遂げます。何としてもやり抜きます。 B：最後までやり切ってください。あなたは、とてもやる気があると思います。 A：オリンピックで 金メダルを取ってやる。 B：君ならやれる。やってみる価値はある。 A：今まで失敗していましたが、今回の実験で、とうとうやりました。 B：よくやった。ついにやり遂げたね。 今年も大変だったが、何とか収獲までやり終えることができた。 えっ、本当にくれるの？ やった、ずっと欲しかったんだ。ありがとう。
	行動場面	小説や、映画などのフィクションでよく使われる「やる」。	
	言語目標	マイナスな心情を表す「やる」の表現を理解できる、あるいは使える。	
	嗜好	一杯やる・たばこやる	
	病氣・けが	胃をやる・足をやった・はしかをやった・骨折をやった (目的語は身体部位、大病、大けがに限られる「×かせをやった」)	
「やる」 を含む 語彙・ 表現	被害	詐欺にやられた・台風でやられた	例文 仕事をのりに、同僚と一杯やる約束があります。 最近、休憩中にたばこやる人も減りましたね。 さっき、自転車で転んで、足をやったみたいです。 子どものころ、はしかをやりました。 台風19号の時に、屋根をやられました。 この程度の仕事は、一人でやりなさい。 結局、一人で残業をやらされました。 もう彼女とやったのか。 試合後半は、一気にやれ、いいな。 おまえら、やっつまえ。 アンパンマンが、バイキンマンをやっつける。 やられたらやり返す。倍返しだ。 あいつをボロボロにしてやる。 テロの首謀者ビンラディンをやる。 あいつ、覚醒剤をやっつけて捕まったらしい。
	強要	やれ・やらされる	
	性交	あいつとやる	
	攻撃	やれ！・やっつまえ・やっつける・やり返す・やる	
	犯罪	殺人をやる・覚醒剤をやる	

## おわりに

本稿では、「やる」という動詞には、自らの意志を肯定的に表す働きがあるという考えのもと、辞書や先行研究、日本語教育の現状を概観し、さらに母語話者の話し言葉や談話で使われている、自らの意志を肯定的に表す「やる」について分析した。その結果、現状の記述では取り上げられていない用法、つまり「やる」の目的語が文脈や直前になく、不特定の対象に使われる場合の発話行為に、自らの意志を肯定的に表す「発語内の力」があるのではないかという考察に至ったのである。それを踏まえて、意味論と語用論の側面を統合し、文機能の検証を加え、新たに「やる」の働きの分類を行い、「やる」の意味・用法がなおざりにされている日本語教育において、「やる」を導入するためのシラバスの作成を試みた。

「やる」という動詞の特性を、多角的な視点から掘り下げ、日本語教師や学習者にわかりやすく、自然に使えるよう分類し、提示したつもりである。しかし、さらに異なる視点から、「やる」という動詞のアプローチが可能かもしれない。今後は、このシラバスで「やる」の指導を行った場合、学習者の自然な会話に生かされるかどうか、という有効性を検証したい。

本稿が日本語教育における「やる」の指導法改善の一助になれば幸いである。

## 参考文献

- 大塚望(2002)「「する」と「やる」－非動作性名詞がヲ格に立つ場合－」『日本語科学』12:7-28 国立国語研究所
- 大塚望(2006)「行為動詞「やる」の俗語性」『日本語日本文学』16:33-41 創価大学日本語日本文学会
- 大塚望(2014)「初級教科書における「する」と「やる」」『日本語日本文学』24:41-61 創価大学日本語日本文学会
- 國弘保明(2007)「話し言葉に於ける「やる」と「する」の使われ方の相違について」『拓殖大学日本語紀要』17:49-60 拓殖大学留学生別科
- 豊田圭子(2014)『動詞ヤルの意味用法についての歴史的研究』48 岡山大学大学院社会文化科学研究科学位論文
- 豊田豊子(1974)「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』1:77-96 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 中本正智(1986)「特集・類義語の意味論的研究—やる・する—」『日本語研究』8:39-41 東京都立大学国語学研究室
- 堀口和吉(1984)「動詞「やる」の一考察「行る」「演る」の誕生」『山辺道:国文学研究誌』28:31-49 天理大学国語国文学会



## 自らの意志を表す動詞「やる」

村木新次郎(1980)「日本語の機能動詞表現をめぐって」『研究報告集』2:17-75 国立国語研究所

森田良行(1991)『語彙とその意味』100-101 アルク

山岡政紀(2000)『日本語研究叢書 13 日本語の述語と文機能』85-86 くろしお出版

山岡政紀 牧原功 小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門—』112 明治書院

山岡政紀 牧原功 小野正樹(2018)『新版日本語語用論入門—コミュニケーション理論から見た日本語—』10-13 明治書院

Austin, J.L. (1962) How to Do Things with Words, Oxford University Press. 99-160 (坂本百大邦訳(1978)『言語と行為』大修館書店)

## 辞書・教科書

見坊豪紀 市川孝 飛田良文 飯間浩明 塩田雄大編(2014)『三省堂国語辞典第七版』三省堂

小泉保 船城道雄 本田晶治 仁田義雄 塚本秀樹編(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店

日本国語大辞典第二版編集委員会編(2002)『日本国語大辞典第二版』小学館

庵功雄 高梨信乃 中西久実子 山田敏弘著(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

小柳昇著(2004)『ニューアプローチ中級日本語[基礎編]改訂版』日本語研究社

小山悟著(2002)『J. Bridge ジェイ・ブリッジ』凡人社

スリーエーネットワーク編著(2012・2013)『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ第2版本冊』スリーエーネットワーク

東京外国語大学留学生日本語教育センター編著(2011)『初級日本語上・下』凡人社

『JF 日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』

<https://jfstandard.jp/publicdata/ja/render.do> (最終閲覧日:2020年1月1日)